

(2) 事例別の意見交換会のパフォーマンス評価の試み

＝本報告は詳細報告の要約であり、別添の表は詳細にわたるので省略する＝

I 評価方法

(ア) 検討における視点

以下について、どのように実施し、効果をあげたか？

- (i) 誰に、何を、どのように、どこまでの明確化と目標の設定
- (ii) 目標達成手段の検討と具体化
- (iii) 実施と事後評価

(イ) 評価の手段

- (i) 「食品安全委員会年報」に報告されたデータよりアンケート結果他を利用した。
- (ii) 外部から知りえない部分、たとえば目標の設定の有無、対象の明確化、事後評価や開催費用などについては仮定をおいて推測した。
- (iii) コミュニケーションの目的、対象によって数値指標を参考に検討した。すなわち、理解の進展、信頼性の向上、態度の変容、情報と意見交換の満足度、コミュニケーションの効率などを検討する。

(ウ) 検討の対象としたプロセス

意見交換会について

異なるテーマまた物質の事例について、内容の性質毎にコミュニケーションの相手と目的から考え検討した。

(A) 魚介類より摂取するメチル水銀による胎児の知能発達への影響リスク

- (i) リスク評価の概要： 摂取から発症にいたる経路と体内動態がほぼ解明され、ヒトのデータを基にしたリスク評価が可能であった。
- (ii) コミュニケーションの主な対象は妊娠中およびその可能性のある女性、および保健指導にあたる地方行政の担当者と漁業・水産品流通関係者など
- (iii) コミュニケーションの目的は、対象となる人々、および指導にあたる人々の理解の推進と普及にあると考えられ、わかりやすい情報の広範な提供が必要とされた。

(B) 米国・カナダ産の牛肉輸入とBSEのリスク

- (i) リスク評価の概要： リスクの大きさはほぼ解明され、対策と手段も明確であるが、摂取から発症に至る生体内での動態・発症メカニズムの詳細と種差・個体差および種間の障壁を構成する要因が未解明で、科学的な不確実性がかなりある。
- (ii) コミュニケーションの主な対象は消費者および牛肉取扱い業者と生産者、行政関係者と考えられるが、彼らの関心の焦点はアメリカの対策の向上と日本政府の交渉

姿勢などリスク管理に重点がある。

- (iii) コミュニケーションの目的は、リスク評価結果とリスク管理措置はほぼ明確であることの理解の推進とこれまでの経緯から存在する行政への不信感の低減にあると考えられた。

(C) 健康食品摂取に際してのイソフラボンの摂取上限値の設定と潜在的なリスク

- (i) リスク評価の概要： ヒトのデータはあるが明確なリスクを示す性質のものではなく、生理周期の延長などである。
- (ii) コミュニケーションの主な対象は健康食品を利用する消費者、特に潜在的なリスクの可能性のある女性および彼らに保健指導をする人々と健康食品取扱関係者
- (iii) コミュニケーションの目的は、広く用いられる可能性の高い「健康食品」によるベネフィットとリスクの可能性への理解の推進・普及と信頼性高い情報への誘導にあると考えられる。

II アンケート結果から見られた指標による検討結果

(A) 魚介類より摂取するメチル水銀について

- (i) 意見交換会参加者の分布を見ると、東京と大阪という大都市でのみ開催されたことも影響したと思われ、行政関係者(31%)および食品関連事業者(24%)が多数を占めた。リスク評価の内容を理解しえて正しい理解を市民に伝える役割を担う行政関係者と、流通において食品関連事業者がいわゆる風評被害に踊らされないためには、妥当な参加層が得られたと言って良い。広く市民に正確な情報を仲介する役割を持つマスコミ関係者の参加が少ないのは、情報の内容が緊急性を持たないと判断されたか、あるいは厚生労働省でプレスリリースで相当詳しく解説していたからかも知れない。
(別添1-表1)
- (ii) 配布資料、専門家の講演、意見交換会での応答について、ほぼ70%前後が「わかりやすかった」と答え、成果をあげている。(別添1-表2)

(B) 米国・カナダ産の牛肉輸入とBSEのリスクについて

- (i) 全国7箇所の大都市で開催されたが、これまでの経緯もあり、消費者団体や無職・主婦・学生に分類される層の参加が多かった。マスコミ関係者はアンケート回答者中で2名と少なかったのは、あるいは自らの感想を伝えることよりも報道を優先したからであろうか？(別添1-表1)
- (ii) 配布資料、専門家の講演について、「わかりやすかった」と答えた方は60%台にとどまり、意見交換会での応答では36%が「わかりにくかった」と答えている。(別添1-表2)
- (iii) 他方で、事前に評価案を「理解していなかった」とする人で、「理解が深まった」

とする人が多く見られたことは意見交換会の成果の一つと言って良い。また参加者中に食品安全行政の役割分担をすでに知っていた人がかなり多くいたが、「知らなかった」という96名中の59名が理解が深まったと答えており、正しい情報を伝えることの意義を指摘できる。

- (iv) もう一方で、食品安全委員会への信頼度の進展については、「信頼していなかった」または「どちらでもない」人たちの間では、「信頼が深まった」よりも「不信感が増強された」という回答が多かった理由としては、不信感を持つ人は態度の変容に対して抵抗性が大きい。「不信感が増強された」と回答する原因となるような表現か内容があったのではないかと推測されるため十分検討する余地がある。
- (v) 配布資料を、研究・教育機関、生産者、行政関係者の70%以上がわかりやすかったと答えたが、意見交換時の応答については生産者、無職・学生・主婦、消費者団体、マスコミ関係者は「わかりにくかった」と答えており、複雑なリスク評価を予備知識を持たない人に短時間の説明で理解させようとしても簡単ではない、または無理があると言える。
- (vi) (v)と並行して、行政関係者、研究・教育機関、食品関連事業者と生産者の多くは、意見交換会全体として評価していたが、無職・学生・主婦、消費者団体の間では、必ずしも評価は高くなかった。(別添1-表3)

(C) イソフラボン摂取による健康影響と潜在リスクについて

- (i) 参加者の大半(47%)が食品関連業者、ついで研究教育機関(15%)で、その次は無職・学生・主婦であり(A)、(B)の参加者層と大きく異なる。コミュニケーションの主な対象は健康食品を利用する消費者、潜在的なリスクの可能性のある女性および保健指導行政担当者と健康食品取扱関係者と考えられたが、このうち健康食品取扱関係者が圧倒的に多く、その意味では直接的にハイリスク集団とリスク管理の一方の当事者である保健指導者に伝えるという目的からは、ずれていた。(別添1-表1)
- (ii) 配布資料、専門家の講演、意見交換会での応答のいずれについても、80%以上の人が「わかりやすかった」と答え、成果をあげている。(別添1-表2)
- (iii) 評価案への理解が深まったと態度の変容が見られたことは、(i)と関連して興味深く、また「パネル討論を通して知りたい事柄が語られた」とする意見が70%ありパネル討論が基調講演を補足する上で役立っていると思われる。
- (iv) 「会場で伝えたいことや、知りたいことの意見交換はできなかった」とする意見が多く(43%)あり、「関係者の意見の理解が深まった」とする者は少なく(33%)、関係者への信頼度の進展に「変化なし」(62%)とする回答になっている。これは現状の意見交換会の形態では、討論時間や発言者数が非常に制約されるためと考えられ、パネル討論が一定程度有効であった半面で、より少人数の膝を交えたような意見交換の場の必要性を示している。

III 目的に対応したコスト・パフォーマンスの予備的検討

意見交換会で何人の人に直接アプローチでき、何人に理解の進展、信頼度の深まりなどの態度の変容、会全体の肯定的な評価（満足度）などのアウトカムを得られたかを考えて見た。

(i) 目標と考えられる対象へのアプローチ

- * メチル水銀のリスク評価と BSE リスクの評価については、ほぼ目的と考えられる対象が参加したが、イソフラボンリスク評価では必ずしも適切な対象に対して直接メッセージを伝えられなかったのではとの疑問が残る。
- * 今回調査したいずれの意見交換会でもマスコミ関係者のアンケート回答者が極度に少なかったのは、そもそも参加が少なかったのか、またはアンケートに答えることをしなかったのかで意味は異なる。もしマスコミ関係者の参加が少なかったのであれば、意見交換会以外のプレスリリースで足りていると考えられているのか、またはマスコミ関係者の関心を引かなかつたかだが、後者だとすれば今後の改善が必要である。

(ii) 参加人数とパフォーマンスのアンケート数値から見た定量的評価の試み

- * 3種の意見交換会の平均参加者数は、106～137名であった。
- * BSE リスク評価の意見交換会でのみのアンケート結果だが意見交換会全体を評価するとした者が66%、評価しないとした者は22%であり、おおむね肯定的に評価された。BSE リスクでは、評価案への理解の進展について、「理解していなかった」106名中、「理解深まった」60名、「理解している」296名中の「理解深まった」は152名、「信頼していた」206名中の「信頼深まった」は67名、「信頼していなかった」65名中「信頼深まった」は6名、食品安全行政の役割分担の理解については、「知っていた」417名中の「理解深まった」は114名、「知らなかった」96名中「理解深まった」は59名であった。
- * イソフラボンリスク評価事例では、273名の参加を得て評価案、および関係者意見への理解について、回答者150名(55%回答率)中のうちそれぞれ評価案につき79名と関係者意見につき50名の「理解を深め」、意見交換会の応答では、120名に「知りたい内容を伝え」、パネル討論では105名に「知りたい事柄を語り」、28名の「関係者への信頼を深め」ることができた。

(iii) コスト・パフォーマンスの試験的検討

- * 大規模な意見交換会の開催は、手間と費用を要する。ここで開催費用に関するデータは手元にないので仮に1回開催の平均費用を50万円と仮定しコスト・パフォーマンスの試験的検討を行ってみた。
- * BSE リスクについて7回のリスク意見交換会を通して、905名の参加者を得、59%の回答率の集計結果から、「理解を深める」および「信頼を深める」という態度の変容につながるアウトカムについては以下の事実が見られた。すなわち回答率を考慮すると延べ359名の評価案への理解を深め、延べ124名の食品安全委員会取組みへの信頼度を高め、

延べ 293 名の食品安全行政役割分担への理解を深めることができたと推計される。もし 1 回の開催に仮に 50 万円を要したとすれば合計約 350 万円となり、参加者 1 名当たりでは 3 万円を要して上記のようなアウトカムを得られたと計算される。

- * イソフラボンリスク評価では、55%の回答率を考慮すると、評価案につき延べ 131 名および関係者意見につき延べ 91 名の「理解を深め」、意見交換会を通し延べ 51 名による「関係者への信頼を深めた」。意見交換会の応答では、延べ 218 名に「知りたい内容を伝え」、延べ 133 名が伝えたい、あるいは知りたいことの意見交換ができたという満足感を達成できたが、延べ 116 名が意見交換ができなかったと不満であったことになっている。またパネル討論では延べ 191 名の「知りたい事柄を語られた」
- * もし 1 回の開催に仮に 50 万円要するとすれば、2 回で合計約 100 万円となり、参加者 1 名当たり約 1 万 5 千円かけて、この問題に関して以上のアウトカムにつながったと推計される。